

仕事人秘録

1996年、川崎氏は名古屋市立大学に新設された芸術工学部の教授に招かれた。

名古屋市大は私が提示した教授就任の条件に応じてくれた。例えば、私が米国で注目した2億円もする光造形システムを導入してくれた。「メビウスの輪」のように図面上で想像はできても実物に落とすことができなかつた造形を可能にする優れたものだ。この装置によって人工心臓のデザインを進めることになった。

在職中、人工心臓の成果をもとに医学博士号を得た。若いころ医者をめざすことを父に約束したが、工業デザイナーの道を選ん

未来の予感を形に

⑩

工業デザイナー

川崎 和男氏



大阪大学の研究室で大学院生を指導する川崎氏

構想巡り溝、学長就任辞退

らと新設大学のあり方について話し合ったため、札幌を毎月訪れていた。財政破綻した夕張市の問題解決に貢献する活動や、北海道に基地が多い自衛隊に1年生を体験入隊させて多くの「気づき」を得てもらう学習など、運営構想を温めた。

初代学長に内定後は、大学の制度設計に関与できると思っていたが「黙っていてくれ」という雰囲気だった。実力主義で教員を採用したいが市側と意見が合わない。公立大学だから合議重視はある程度仕方ない。だが、リーダーシップを認めないのなら私はただの看板になってしまふ。期待してくれた市民や受験生に対して申し訳ないことになったが、大学運営で私の信念を通すことができなことが分かった。内定発表から約2カ月後、千歳空港で待っていた副市長の黒塗り公用車に乗せられて札幌市内へ向かう時、学長の辞退を決意した。

多くの大学教員は実績と関係なく、いつまでも地位にとどまることができる。民間企業に比べ人材の流動性は低く、評価も甘い。内側にいると国公立大学の問題点がよくわかった。

だ。30年後、デザインの経験を生かして医学を研究する立場になったことを父も喜んでくれたようだ。

大学で仕事する際もデザイナーの仕事と同様に自分の信念に基づいて行動した。日本の大学はデザインを美術に分類することが多く、工学や医学とのかわりが軽視されてきた。私はデザインが医学と工学が連

携するための接着剤の役割を果たせると考えてきた。医学や工学の問題解決に、工業デザインの思考が有効であることを名古屋市大にいた10年間で世に示すことができたと思う。

2004年、新設された札幌市立大学の初代学長に内定したが、その2カ月後に白紙になった。内定前の1年ほどは市長

重視はある程度仕方ない。だが、リーダーシップを認めないのなら私はただの看板になってしまふ。期待してくれた市民や受験生を象徴している。

私が名古屋市大から大阪大学に移籍した時は「おめでとう」と言う人がけっこういた。何がめでたいのか。「公立大よりも旧帝大の方が格上」という先入観は、日本の現代社会の嫌らしさを象徴している。